

2025年度 研究成果報告書

所属機関名	筑波大学
申請者氏名	松田 侑子
研究課題名	障害・疾患を持つ同胞のいる個人の心理社会的適応に影響する特性要因の検討

【研究の概要】

本研究の主たる目的は、きょうだいの心理社会的適応に関わる特徴を把握するための基礎資料を収集し、共感性による心理社会的適応への影響を縦断的に検討することである。

研究1においては、Time1時点のデータを使用し、ストレス場面における対処や認知的評価の傾向、共感的関心・視点取得といった特性要因の観点から、障害種別における違いを探索的に明らかにした。また、きょうだいの心理社会的適応を捉えるために、きょうだい関係、経験する家庭内の対人ストレス、精神的健康、協調的幸福感についても併せて検討した。

研究2においては、Time1時点の共感的関心・視点取得がTime2時点の精神的健康、協調的幸福感を予測するかどうかを確認し、特に障害種別による共感性の影響の違いを浮き彫りにした。その際、リスク要因として家庭内の対人ストレス、保護要因としてきょうだい関係を取り上げた。ここでは、発達障害群をASD群とADHD/SLD群に分けて検討した。

研究1・2を踏まえて追加で行った研究3では、回答者の広範な自閉症表現型（BAP）を考慮しながら、親子間境界、孤独感、共感性について、障害種別による群間比較を行った。

【研究の内容及び成果の詳細】

1. 研究内容及び成果（本研究によって得られた新知見、成果等）

・研究1で得られた新知見・成果

障害種別（障害無群／発達障害群／身体・知的障害群）と精神障害有無を独立変数とした、二要因分散分析を行った。その結果、身体・知的障害群において、同胞が精神障害も有している場合に、統制不可能事態への対処傾向のポジティブ予期待点が低い、家庭内の対人ストレスの被拒否得点が高い、K6得点が高いことが示された。これらを踏まえると、同胞が身体・知的障害に精神障害も併存する場合には、そのきょうだいの心理社会的適応上のリスクが高まるため、支援を必要とする一群であることが新たに見出された。

また、家族場面と友人場面における各認知的評価が、きょうだい（発達障害群／身体・知的障害群）・非きょうだい（障害無群）の間で異なるかどうかを明らかにするため、マルチレベル分析を行った。その結果、当初の予想に反し、障害の有無における状況による認知的評価の違いは見出されなかった。

・研究2で得られた新知見・成果

回答者の性別、同胞の精神疾患の有無を共変量として、被験者内要因である調査時期（Time1／Time2）、被験者間要因である障害種別（障害無／発達障害／身体・障害）を独立変数、対人ストレスの各下位尺度、K6、協調的幸福感をそれぞれ従属変数とした混合ANCOVAを実施した。その結果、いずれの群間差も有意ではなく、少なくとも1か月間の心理社会的適応の変化において、きょうだいであるか否かは関係しなかったといえる。

次に、共感性がK6あるいは協調的幸福感に及ぼす影響過程を明らかにするため、群ごとに階層的重回帰分析を行った。その結果、知的・身体障害群のみ、視点取得が協調的幸福感において有意な正の影響を与えていた。補足的に、発達障害群をASD群と非ASD群に分けて同様の分析を行ったところ、ASD群においても視点取得が、協調的幸福感に有意な正の影響を与えていた。これらを踏まえると、共感的関心のような感情的共感よりも、視点取得のような認知的共感が心理社会的適応において重要であることが示された。

・研究3で得られた新知見・成果

研究3においては、きょうだい群に焦点をあて、ASD群、ADHD・SLD群、知的・身体障害群に分けて検証を行った。年齢段階とBAPの「特異な言語使用」を共変量として、3群間で、親子間境界、孤独感、共感性の比較を行う共分散分析を行った。その結果、「乖離した境界」において、ASD群は非発達障害群よりも高く、ADHD・SLD群は非発達障害群よりも高い傾向が示された。従って、障害を有する同胞の存在によって、親子関係は影響を受けることが示唆された。

2. 今後の研究の見通し

本研究を踏まえて、今後の研究の見通しを以下3点述べる。

第一に、きょうだい研究における、同胞のメンタルヘルスの考慮である。本研究では、共感性、きょうだい関係、家庭内の対人ストレスに係る変数、心理社会的適応について、同胞の障害有無や、障害種別による違いを検討したが、全体として特徴的な差は認められなかった。しかし、精神障害が併存する場合には、身体・知的障害群で心理社会的適応のリスクが高くなることが明らかになった。これは同胞の障害そのものではなく、メンタルヘルス自体もきょうだいに影響を与えることを示唆しているため重要な着眼といえるが、従来のきょうだい研究では、精神障害の併発についてほとんど考慮されていない。しかし、同胞の外在化問題よりも内在化問題が、きょうだいのネガティブな対同胞感情と関連しているといった指摘もあり（Shivers & Dykens, 2017）、同胞が抱える問題を多角的に捉えていく視点が必要かもしれない。特に、今回は、精神障害の有無を統制した結果、障害無群／発達障害群／身体・知的障害群の間に際立った違いがなかったため、青年後期のきょうだいにおける同胞の精神的健康が有する機能を詳細に検討することは、本研究領域において有意義であると考えられる。

第二に、きょうだいにおける共感性が持つ役割の更なる探索である。先行研究では、きょうだいは非きょうだいよりも共感性が高いとする知見（Perenc & Pęczkowski, 2018; Shivers, 2019）と、両者に差はないとする知見（Shivers & Dykens, 2017）が混在しており、一様ではない。今回は後者の知見を支持する結果となったが、様々な剰余変数が考えられ、単純な比較は難しい。他方、視点取得については、身体・知的障害群、ASD群において協調的幸福感を促進する結果が示され、障害種別による違いだけではなく、感情的共感よりも認知的共感が重要であることを明らかにできた点はあるといえる。しかし、今回は特性としての共感性を取り上げたが、対象となる同胞に対して向けられるものであるのかどうかは十分確認できなかった。従って、共感を向ける相手を想定した検討を行うことで、きょうだい研究における共感性の機能について更なる知見を提供できると考えられる。

第三に、障害を有する同胞の存在による、きょうだいと親の関係による影響についての更なる検討である。研究3では、年齢やきょうだい本人のBAPに関連なく、ASD児・者のきょうだいにおいては、親との間に距離のある関係性を知覚している可能性が示唆された。すでに松田・安田（2026、心理臨床学研究第44巻2号、2024年度前川財団研究助成）では、きょうだい群において親役割代行parentificationによる抑うつへの否定的な影響が明らかにされている。しかし、研究3は補足的な調査となり、きょうだい群のサンプルサイズが十分ではなく、親子関係のあり方に関する詳細な検討が待たれる。

3. 本年度の学会発表・論文・刊行物・著書名等（今後、発表等を予定しているものも含む。）

研究1で実施したマルチレベル分析に関する成果は、日本心理学会第90回大会にてポスター発表をエントリーしている（2026年9月4日－6日、東洋大学）。また、研究1で実施した混合ANCOVAに関する成果は、日本心理臨床学会にて（2027年8月27日－29日、パシフィコ横浜）、研究2で得られた成果は、日本心理学会第91回大会（2027年9月10日－12日、朱鷺メッセ）にて、研究3は日本教育心理学会第69回総会（2027年10月9日－11日、ライトキューブ宇都宮）にてポスター発表を計画している。

また、論文投稿については、研究2の成果を主軸として、今年中に国内の学会誌への投稿を行う予定である。